

[3]

氏名	凌 昊
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第 241 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	中国古代小説中の女性研究 一以明清白話才子佳人小説を中心
論文審査委員	主査 教授 井上 泰山 副査 教授 吾妻 重二 副査 非常勤講師 後藤 裕也

## 論文内容の要旨

本論文は、中国の明末から清代にかけて盛んに制作され広く享受された「才子佳人小説」と呼ばれる一連の小説群に関する総合的な研究である。

本論文の主たる目的は、「才子佳人小説」に登場する様々な特徴を帯びた女性の役割と存在意義を、儒教倫理観に基づく当時の社会背景を視野に入れた上で詳細に分析し、併せて、作中の女性像が後世文学に取り込まれた状況について具体的な作品を分析することによって考察し、当該小説群が後代文学に与えた影響について一定の結論を導き出すことにある。そのことは同時に、文学史上に於ける「才子佳人小説」の意義と価値を確定する試みでもあり、文学発展史上に於いて当該小説群がいかなる位置付けをなされるべきかという、文学史上の重要課題を解くための有力な手掛かりを提供することにもつながるものである。

本論文は以下の章節によって構成されている。

序言

第一節 明清白話才子佳人小説の概要 第二節 明清白話才子佳人小説と女性研究

第一章 明清白話才子佳人小説群における女性

第一節 娘の設定方式 第二節 侍女の設定方式

第三節 母親の設定方式 第四節 女性の性格の特徴

第五節 女性の運命と帰結 小結

第二章 明清白話才子佳人小説群における女性の役柄の設定と女性の地位

第一節 父権下における理想的女性と小説中の女性との符合と衝突

第二節 小説中の性別モデルと性別の関係

第三節 小説から見た女性の社会的地位と家庭内における地位

第四節	小説から見た女性の政治的・文化的地位	小結
第三章	儒家的女性観から見た『玉嬌梨』中の女性	
第一節	『玉嬌梨』について	第二節 儒家的女性観について
第三節	『玉嬌梨』中の女性の形象	第四節 儒家的女性観から見た小説中の女性
	小結	
第四章	『好逑伝』における両性の婚姻観	
第一節	『好逑伝』について	第二節 「情」と「理」の融合
第三節	「情」と「理」の衝突	第四節 愛情に基づく婚姻における功名の不可欠性
	小結	
第五章	『白圭志』における異性への変装	
第一節	『白圭志』について	第二節 『白圭志』における異性への変装
第三節	「変装」から見た小説中の女性観	小結
第六章	『駐春園』における女性同士の情誼	
第一節	『駐春園』について	
第二節	母と娘の情誼に見る男権によって変容した母性愛	
第三節	知己の情誼に見る愛情と嫉妬の葛藤	
第四節	主従の情誼に見る奴隷化された偽物の姉妹感情	小結
第七章	明清白話才子佳人小説群における女性と現実の文人	
第一節	明清の文人が女性を主体とする作品を創作した理由	
第二節	明清の文人が創造した理想化された女性像の虚偽的側面	
第三節	小説中の女性像に投影された明清時代の文人	小結
第八章	明清白話才子佳人小説群における女性と後代文学	
第一節	明清白話才子佳人小説群における女性と『紅樓夢』の女性	
第二節	明清白話才子佳人小説群における女性と『金粉世家』の女性	
第三節	明清白話才子佳人小説群における女性と『傾城の恋』の女性	小結
結論	主要参考文献	

以上の目次が示すように、本論文は、はじめに『玉嬌梨』『白圭志』『吳江雪』など、「才子佳人小説」の代表作とされる作品に登場する女性について、主人公となる娘やその侍女、母親などの性格上の特徴を示した上で、作品中に於いて各々の女性が果たす役割と地位、各作品に共通する結末の共通点などについて分析した後、続く第三章から第六章に於いて、「才子佳人小説」の代表作を四作取り上げ、作者によって理想化された女性像の特徴を具体的に分析し、文学発展史上に於ける位置付けを行っている。

各章の内容をさらに詳しく述べれば、まず序章に於いて従来の研究史を概観してその問題点を指摘した後、第一章では、社会的地位・身分あるいは役割などによって女性を分類し、幾つかの代表的な女性像を提示している。第二章では、儒教的観念を根本理念とする

父権社会に於ける理想的な女性像と作中の女性像とは一致するのか、それとも食い違うのかという点を細かく分析している。第三章から第六章では、「才子佳人小説」の四つの代表作を取り上げて個別に検討を加えている。各々の作品の創作面の特徴から、その儒教的女性観、男女の婚姻観、性別ごとの処理、女性同士の関係といった問題を選び出し、旧来の典型的な創作手法以外の特色について考察している。第七章では、如上の考察によって得られた認識に基づき、作中の女性と現実の文人との関係、更には現実の文人が理想とした女性と実際の女性との差異を探求している。第八章では、「才子佳人小説」に於ける女性像と後世の代表的な白話文学作品、『紅樓夢』『金粉世家』『傾城の恋』などに登場する女性像を比較することによって、「才子佳人小説」という文学ジャンルが後世文学に与えた影響を探究している。

## 論文審査結果の要旨

本論文の副題にある「才子佳人小説」については、早くに魯迅が『中国小説史略』の中で『玉嬌梨』『平山冷燕』『好逑伝』などの作品を挙げてその存在に言及し、その後個別の作品に関する論考は徐々に増えてはいるものの、作品群全体を俯瞰した研究はいまだに現れていないのが現状である。また、「才子佳人小説」に関する従来の研究は、主として「才子」と「佳人」、つまり、士大夫階級の子息と良家の令嬢にまつわる奇遇離合譚のみに焦点を当て、作品ごとに異なる団円への道筋を分析するものが主流であったが、本論文はそうした紋切り型の視点を排し、一連の「才子佳人小説」にとって不可欠の存在である「女性像」を切り口として、その恋愛行動と結末、周囲の環境との衝突、女性像に投影された作者の意識、女性像が後世の小説に与えた影響など、女性をとりまく様々な状況について詳細に分析し、当該小説群の功績と限界を指摘すると同時に、小説発展史上に於ける意義を考察したものである。

明清時代の「才子佳人小説」は、その殆どが男女の邂逅と団円という紋切り型の内容を持ってはいるものの、従来 of 文学の表現形式や類型的作品には見られない固有の特徴を持つ点で「才子佳人小説」全体から見て非常にユニークな分野であると言える。それは、前代の作品を継承しつつ新局面を切り拓くという、中国文学史全体の中で極めて重要な役割を果たしたと考えられる。従って、この分野を研究するにあたっては、鍵となる構成要素である「女性」について、彼女たちがいかなる役柄と職能を与えられて登場するのかを明らかにした上で、さらに、その役柄と職能を通じて、明清時代の社会環境と文人階級に関していかなる認識が得られるかという点を新たに追求する必要がある。

本論文は、如上の問題意識に基づき、先行研究の成果を参考としながら、男女両性の視点のみを切り口とする既存の単純な方式や理念に依拠することなく、儒教的倫理観を背景とした当時の社会状況を念頭に置いた上で、新たな角度から女性を両性関係と同性関係に再配置し、より全面的かつ広範な視野に立って「才子佳人小説」が描き出した女性像を俯

瞰し、同時代の現実の女性が生存した境遇と運命を掘り起こすことに成功している。

また、「才子佳人小説」は、その創作と成立の過程に於いて時代に起因する限界はあるものの、一方で、後世文学に及ぼした強い影響も否定できない。後世の一部の作家、例えば『紅樓夢』の作者曹雪芹は「才子佳人小説」の忠実な読者であった。つまり、後世の作家は「才子佳人小説」が生み出した女性像の特徴を意識的あるいは無意識的に各自の作品に取り込むことによって、より一層独自性を備えた豊かな女性像を創造することに成功したのである。このことは、後世の作品群が前代からの影響を受けて発展したことを明確に示すと同時に、その過程で「才子佳人小説」が恋愛を主題とする小説の発展段階に於いて極めて重要な役割を果たしたという事実をも確認することができる。本論文は、そうした点についても丹念に考察を重ね、一定の合理的な結論を導き出している。

以上のように、本論文は、明清時代に盛行した「才子佳人小説」と呼ばれる一連の恋愛小説群に於ける女性の形象を詳細に分析することによって、そこに投影された文人と作者の願望を掘り起こし、当時の社会背景と密接に関わる新たな真実を浮き彫りにした点で、従来の研究には見られない斬新な視点を提供したものと言うことができる。それは同時に、中国において恋愛を主題とする作品がどのような軌跡をたどって現代文学へと発展してきたかを探るための重要な道筋を示すものであり、文学発展の過程を読み解くための重要な指標となるものである。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。